

第2章

博覧会における「文明」と「野蛮」の階梯 —人類館事件をめぐる清国人留学生の言説

福田 州平

Guiding Question

日本は、近代化を進める手段として、欧米で開催されてきた博覧会に注目し、政府主導で1877年から1903年まで、内国勸業博覧会を五回開催しています。今回とりあげる第五回内国勸業博覧会は、事実上の「万博」といえるぐらいの規模でした。本章では特に、同博覧会の場外余興として企画された、日本内外の人びとを生きのまま展示する「人類館」に注目します。この企画で、清国人が展示されようとしたのですが、当時の留学生は反対運動を繰り広げ、清国人の展示を断念させています。しかし、この抗議の言説は、今日的には「政治的に正しくない (politically incorrect)」ものだったといわれています。どこに問題があったのでしょうか？そして、その問題を、現代の中国人と日本人は克服できたといえるのでしょうか？

本章は、1903年に大阪で開催された第五回内国勸業博覧会での人類館事件における清国人留学生の抗議言説をとりあげ、考察するものである。まず、背景知識を提示するために、政治的儀式としての万国博覧会の位置づけ、および万国博覧会のはじまり、そして日本における万博の受容と内国勸業博覧会開催について述べる。つづいて、人類館事件のルーツと事件概要、そこに潜む差別の階層の問題、そして清国人留学生の抗議運動がはらんでいた問題について、先行研究を整理する形で論じる。そして、人類館事件が示唆する現代への問いを提起したい。

1. 万国博覧会と近代化

1) 政治的儀式の場として

なぜ国家は万国博覧会(万博)のようなメガイベントを実施しようとするのだろうか? この問いに答えるためには、次の質問を経由することが鍵となる。すなわち、どうやったら人々が「国家」の存在を信じるようになるのか、あるいは信じるようになったのかという問いである。おそらく、「国家」を実際に見たり、あるいは触ったり、匂いをかいだ経験のある人はいないはずである。近代の国民国家は、ベネディクト・アンダーソンに従えば「想像の共同体」(アンダーソン 2007)であり、人びとは、見ることも触ることもできない。しかし、現実社会には「国家のために死ぬ」と豪語するものも存在し、その実在性をおおよそすべての人びとが信じている。そして、日常生活のなかでは、めったに会うことのない政治家や官僚の統治が、国内で作用している。

「国家」の存在は、国旗や国歌、あるいは神話的なエピソードなど——これらをシンボルと呼ぼう——を通じて、理解されている。デイヴィッド・カーツァーは、「直接観察をはるかにしのぐ社会に住む私たちは、抽象的シンボル手段をとおしてのみ、より大きな政治実体と関係できるのだ」(カーツァー 1989: 18)と指摘する。人びとは、シンボルを生み、そして消費することを通じて、さまざまな出来事やモノ、あるいは人生などに意味を与えようとしている。

ここで、シンボルと政治の関係について、マーレー・エーデルマンの説にそって議論をすすめたい(エーデルマン 1998)。シンボルが網のように組み合わせさせたものが、儀式である。儀式は、私たちの住む世界に意味を与える助けになっている。これは国家にとっても重要である。人びとは、シンボルを通じて社会を理解しようとするからである。シンボルを通じて、何が重要で、なにが良いことなのかを学ぶのである。そして、シンボルが組み合わせさせた網である儀式への参加を通じて、人びとは、「国家」の存在を理解し、それと一体化しようとする。その代表的な例が、選挙である。選挙という儀

式を通じて、人びとは国家の政治に参加しているように感じる。選挙は、一般の国民が国政に参加する数少ない機会のひとつである。もっとも、投票結果が国政に反映され、公共政策形成に影響を与えることは、おそらく稀である。ここでエーデルマンが指摘したいことは、選挙は、意味がないということではない。彼は、選挙が社会に果たす役割は、普通に考えられているのとは、違うところがあると指摘したいのである。彼は、選挙を政治的な儀式として考えれば、それへの参加によって、人びとは国家の存在を認識し、採用された公共政策を受け入れることが理にかなっていると思わせるものだと論じたいのである。そして、こうした仕組みがないと、「国家」は持続的な存在とはなりえない。

このカーツァーやエーデルマンの議論に沿って考えれば、万博は、非常に重要な政治的儀式といえる。なぜなら、パビリオンや展示物といったシンボルによって、会場を訪れた人びとはある種のイデオロギーや観念を学び、共有することができるからである。この意味で、万博は決して非政治的なイベントではなく、むしろ非常に政治的なイベントであるといえるのだ。本章の考察の範囲外だが、2010年に開催された上海万博も、そこにどのような政治的な目的があったのかという観点から考察すれば、現代中国の問題の一端が垣間見えることだろう。

2) 万国博覧会のはじまり

万国博覧会のはじまりは、1851年のロンドン万博まで遡ることができる。博覧会という形では、1851年以前にも、1844年に開催されたパリ博覧会、あるいはもっと遡って1789年にフランスで行われた博覧会がある、しかし、これらは国内向けのイベントだった。諸外国が参加しその展示物が並ぶ大規模な国際的イベントとしての万博は、ロンドン万博が史上初めてだった。

ロンドン万博開催の主たる目的は経済的なものだったといわれている。当時、イギリスは自らの産業力が世界を牽引していたことは、自他共に認めるところだった。一方、イギリスはいずれ諸外国との経済競争が激しくなるとの認識を有していた。諸外国に負けないためには、より多く自国の製品を売

るしか途はない。そのためには、あらたな市場を開拓せねばならない。そこで、世界の国々を招聘して、製品の度合いを比べあう「平和的な競争」への参加を通じて、海外市場を開拓する足がかりにする企画が登場した。この「平和的な競争」こそ、万博にほかならない。当時のイギリスは、外国の人びとが万博会場を訪れたら、イギリス製品を絶対買うだろうと思っていたといわれている。また、会場をおとずれた自国の大衆が多数の展示物を直接目にするすることで、産業および商業の価値を学びとらせる教育目的も並存していた（吉見 2010: 40-41 ; Greenhalgh 1988: 9-10）。

ロンドン万博の会場に建てられた展示施設、水晶宮は、当時としては画期的なガラスを建材とした建物であり、大変な注目を集めた。水晶宮の建築が可能になった背景には、産業革命によるガラスと鉄の産業の大量生産の存在が指摘できる。水晶宮のなかに、イギリスおよび諸外国からの展示品がならべられ、特に当時最先端の機械類は人びとの注目をあつめた。水晶宮で作り出されたこれまでにない非日常的な空間は、訪れた人びとに、近代産業社会が生み出す多様な商品であふれた世界の姿を提示したと指摘されている（松村 2000）。

ロンドン万博の入場者数は、603万人であり、興行的にも大幅な黒字を記録した。この成功をうけて、その後、1853年にダブリンおよびニューヨークで万博が開催されたが、内容や規模の面ではロンドン万博に及ばず、また興行的には振るわなかった模様である。

ロンドン万博の後継といえるのは、1855年のパリ万博である。この万博の開催にあたっては、ナポレオン三世の存在が大きい。ナポレオン三世は、権力掌握後、国内における自らの基盤強化、および帝国の栄光という夢で国民の目を現実からそらす必要性を感じていた。また、彼は外交方針として、イギリスとの関係強化を狙っていた。こうした政治的な目的を織り込んで、1855年にパリで万博が開催されたのである。来場者は、展示物である蒸気機関車などの機械類に魅了された。また、イギリスからは、クリミア戦争の協力の礼をかねて、万博会場にヴィクトリア女王と夫君アルバート公が来訪した。これによって、英仏関係の強さを世界的に示したのである。興行的に

は赤字のイベントだったが、ナポレオン三世がフランスの君主であると世界的に認めさせたということという意味では、政治的な成功を収めたといえる（鹿島 2000）。

社会思想面に注目すると、1855年のパリ万博開催の企画者たちは、サン＝シモン主義といわれる科学の優位のもとに産業社会をすすめる思想をもち、そして万博を「百科事典」として、あらゆる科学的知識を集結させ、事物への表現形式に変えようと考えていた。その思想をより徹底的にすべく企画された万博が、1867年に同じくパリで開催された。会場は、パリのシャン・ド・マルスになったが、ここは、ナポレオン三世の叔父、ナポレオン一世の凱旋の舞台だった。ナポレオン三世は、万博開催を産業の大帝国である第二帝政の凱旋ととらえて、会場地の決定を下したのだった。こうして開催された1867年のパリ万博では、会場内を走る蒸気自動車が来場者の注目をあつめた。また、ワインの品評会、植物園、水族館、諸外国の食が楽しめるビュッフェなど、来場者をひきつける仕掛けが施された。そして来場者の関心をあつめるべく、非西洋を異質なものとして演出し展示しようとする試み、つまりオリエンタリズム的な展示がおこなわれた。これは、第二帝政の威光を非西洋諸国がうけいれることで、「野蛮」から「文明」へと導かれるのだというメッセージだったと指摘されている（鹿島 2000）。

以後、万博は、ヨーロッパ各国およびアメリカでも開催されるようになっていくが、そこにはロンドン万博やパリ万博のように何らかの政治的な目的が入り込み、特に植民地主義的な要素が見られることが少なくなかった。

2. 内国勸業博覧会のはじまりと発展

1) 日本での万博の受容

史上初の万博が行われた1851年、日本はまだ鎖国状態だった。しかし、このような状況であっても、ロンドン万博開催の報は、『別段風説書』において⁽¹⁾、「現在イギリスの首都において、地球上のあらゆる地域の芸術品及び産業品の展示会が行われている。そのために設けられた建物は、すべてガ

ラスと鉄でできている」(松方編 2012: 231) と、日本にも伝わっていた。この情報を当時の江戸幕府がどのように受け取ったのかは不明であるものの、開催情報が伝わっていること自体、万博開催がもたらした世界的なインパクトの一端が垣間見えて興味深い。

日本の「万博デビュー」は、まず、1862年のロンドン万博に、イギリスの初代駐日総領事ラザフォード・オールコックが、自ら収集した日本の漆器や版画などの品物を展示したことはじまる。当時、万博で展示される各国の品物は、その国の文化を察知するための資料でもあった。日本がまだヨーロッパに知られていなかった当時、オールコックのコレクションに対するロンドンでの評価は、日本の「国民性」をみごとに表現したものとして評価された。そして、ヨーロッパにおけるジャポニズムの契機ともなった。他方、この出品物を見た、幕府使節の竹内下野守一行は、オールコックの収集した「粗末」なものが展示されていることを見るに耐えないと感じており、ロンドンとは正反対に評価している(吉田 1985: 2-6; 國 2010: 16-20)。

日本が万博へ参加したのは、1867年のパリ万博がはじめてである。まず、フランス公使のレオン・ロッシュが、幕府監察の栗本鋤雲に、パリ万博への出品を打診したことにはじまる。なお、このとき、"exposition" の説明を聞いて、栗本は「博覧会」の訳語を考案している。幕府は、パリ万博への参加を決定し、将軍徳川慶喜の弟である昭武を名代として派遣することにした。当時、幕府の統治能力は限界を迎えつつあった。そこで、パリ万博に参加することによって、政権の正統性を世界にアピールし、そしてその維持を狙っていたと指摘されている。しかし、幕府の狙い通りに事は運ばなかった。幕府が万博に参加するに際し、諸藩にも参加を呼びかけ、佐賀藩と薩摩藩がこれに応じた。両藩の狙いは、万博を利用した軍艦購入や商談だった。そして、万博開会式に、薩摩藩は琉球国王使節として参列し、ブースも琉球国産物陳列所として借り受け、さらに会場内では日章旗と薩摩藩の旗を交差して掲げ、いわば「独立国」として参加していた。佐賀藩も、薩摩藩にならって、肥前国と標榜し、日章旗の下に藩旗を掲げた。パリでは、幕府、薩摩藩および佐賀藩は同格であると受け取られ、幕府の当初の目論見はもろくも崩れ去った

のだった。そして、翌年、日本は明治時代を迎えるのである（吉田 1985: 7, 20-30; 國 2010: 27-43）。

2) 政治的儀式としての内国勸業博覧会のはじまり

1873年、ウィーンで、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の治世 25周年を記念して、万博が開催された。この万博への参加について、明治政府は当初消極的だったものの、ウィーン側から万博は世界各国の産物が一堂に会するので、短時間かつ低コストで西洋文物の視察ができると説得され、参加を決定する。ウィーン側にとっては、未知の国・日本を万博に参加させることで、展示の目玉にしようと考えたようである。他方、日本は、ウィーン万博を、誕生して間もない自国を国際社会に知らしめるチャンスだと捉えた。そして、万博において支配の正統性をアピールするとともに、優れた品を陳列して国の評判をあげようとした。さらに、近代化を推進して文明国（＝ヨーロッパ諸国）に列するため、世界各国の文物を調査しようとした。同万博を訪れた岩倉使節団は、会場内で小国の出品が大国に引けを取らないことに驚き、その理由を「自主ノ精神」にあると理解した。そして、博覧会での競争は「太平ノ戦争」であり、開明の世においてもっとも必要なことであると報告している。その3年後に開催されたフィラデルフィア万博にも日本は参加しているが、当時、アメリカに留学していた菊池武夫（後の中央大学初代総長）は、同万博の機械館を訪れ、あらゆる工程の機械化に感心し、かつその工業力に圧倒される反面、手工芸品をならべている日本が恥ずかしくてならなかったと日記に残している。こうした日本の近代化への焦燥感は、当時の指導者たちも持っていたものと思われる（國 2005: 29-47 ; 2010: 56-83）。

ウィーンとフィラデルフィアの両万博への参加を通じて、日本は、欧米の工業力に圧倒され近代化の必要性を痛感するとともに、博覧会が国家の近代化に有用であることを学び取る。そして、内務省で産業興行策として「勸業博覧会」の企画がたちあがり、これに「内国」という冠が被せられてはじまったのが、内国勸業博覧会（内国博）である。なぜ、「内国」かということ、国内に目を向けることを優先したという理由もあるが、当時の不平等条約で

は、日本と外国の間でトラブルが発生したとき、日本側に著しく不利益が生じるおそれがあったという点も大きい（國 2010: 89-90）。

博覧会の出品物は日本全国からあつめられたが、明治政府にとって、収集活動は構築してきた中央集権体制が実際に機能するかどうかのテストでもあった。西南戦争の影響で出品がなかった鹿児島をのぞき、ほぼ全国から出品物があつまった。そして、1877年8月21日、東京の上野公園にて、第一回内国博が開催された。出品物の分類は、フィラデルフィア万博のそれをモデルとした。そして開場式は、和装の皇后と侍女を除き、人びとはすべて洋装だったが、これは、西洋化を先導する政府から国民に発せられた強いメッセージだった。そして、内国博の開閉をつかさどるのは天皇の役割とされ、会場では、天皇に関する行事の際に雅楽が演奏された。強い祝祭性をもつ内国博は、天皇の統治の正統性を訴える場となったのだ。優れた出品物に賞をあたえる褒賞制度が存在したが、これは、出品者の功労に対する賞賛とさらなる技術発展を奨励し、かつ出品物に政府のお墨付きを与えることによって、販売を促進する効果があった（國 2005: 51-80 ; 2010: 91-103）。こうして、国家の近代化という政治的意図をもって始められた内国博は、第二回目（1881年3月1日～6月30日）、第三回（1890年4月1日～7月31日）と上野公園で開催された。第四回開催をめぐっては招致合戦が繰り広げられ、京都で行われた（1895年4月1日～7月31日）。

3) 第五回内国勸業博覧会

第五回内国博開催をめぐっても、招致合戦があったが、大阪が開催権を勝ち取る。つづいて、大阪のどこで開催するかが検討され、天王寺今宮が選ばれる。そして、博覧会場へ通じる「一条ノ大道路」を作るように所管官庁から要請があり、大阪は、日本橋筋の拡張に取り取り組む。このとき、日本橋筋に面する「細民部落」が取り壊され、ここに住む「貧民」たちは、なにも保証がないまま退去させられている。当時、「貧民」および「貧民街」は、「不潔」かつ「反秩序的」で、存在自体が「われわれ」の住居する市および国家の「体面」を汚すと考えられていた。特に、内国博は、天皇の来阪、および

外国人の来阪が期待されていたため、これは強く意識されていた。また、当時、急性伝染病が博覧会の来場者数に大きな影響を与えるファクターだった。京都で行われた第四回内国博の客足は、思ったほど延びなかったが、その要因の一つが、コレラの流行だった。このように急性伝染病の撲滅が内国博の成否におおきくかわることから、さまざまな措置が講じられ、その措置の一環として「貧民街」の取り壊しがおこなわれた（松田 2003: 19-35）。

第五回内国博では、外国の政府や企業が自主的に出品している。先述の不平等条約が改正されたことによって、外国人招致の障害が解消されたことが、その要因である。日本政府が出品勧誘を始めると、予想以上の出品申込があり、当初展示場所として予定していた専用のパビリオン（参考館）の面積を増やしても追いつかない状況となった。そこで、カナダなどは、自費建設による参考館付属のパビリオン建設している。結局、14カ国18地域が参加し、「内国」博覧会というよりも小規模な万国博覧会としての様相を呈した（國 2005: 165-174）。

こうして、1903年3月1日、第五回内国博の「開場式」が開催された。しかし、4月20日に天皇臨席のもと盛大に「開会式」が開催されている。少々ややこしいが、これは、内国博を開会するのは天皇の役割であって、天皇が来場しなくても場所は開かれるが（開場式）、会は開かれなためである。博覧会という空間は、天皇のための政治的空間だったのだ（松田 2003: 49; 國 2005: 183-184）。

「余興」として数々のアミューズメント施設が、第五回の内国博では注目された。動物園、ウォーターシュート、イルミネーション、夜間開場、さらには不思議館で行われたカーマンセラの電気の舞、堺市に作られた水族館など、当時の人びとの目を奪うものが多数あった。開会期間中の入場者数は、昼・夜および水族館の来場者を含めると、530万人にもものぼる（國 2005: 184-190; 2010: 181-186）

3. 人類館事件

1) ルーツとしてのパリ万博（1889年）

本章が取り上げようとする人類館とは、第五回内国博で余興として民間人の手によって実施された場外パビリオンであり、ここにアイヌ民族および日本「内地」に近い各国の異人種を集めて、生身の人間を、その生活環境そのままに「展示」したものである。ここで展示されようとした／された、「支那人」、「朝鮮人」、「琉球人」から抗議の声があがり、展示を中止に追い込むことに成功している。本章では、特に「支那人」に焦点をあてて人類館事件について、先行研究に基づきながら、その経緯と問題を論じたい。

人類館事件について論じる前に、まず、万博会場における「人間の展示」の始まりと日本の受容について、簡単に言及したい。エッフェル塔が作られたことで知られている1889年のパリ万博では、大掛かりな植民地展示が行われた。パリのシャン・ド・マルスとトルカデロの間の約40ヘクタールにフランスの植民地館が林立し、そこにアジアやアフリカの人びとを会場内に再現された先住民集落に住まわせて展示した。これが、万博における「人間の展示」のはじまりである。「見世物」として先住民の人たちを出すということは、パリ万博以前にも見世物小屋で行われていた。しかし、吉見（2010）の指摘によれば、大人数で構成される社会をそのまま移植し、非西洋社会を社会進化論の階梯の中に位置づけ、かつ「未開社会」展示の大掛かりな仕掛けを国家みずからが用意するという三点で、これまでの見世物小屋とは異なっている。パリ万博の会場は、エッフェル塔などが表象する「文明」が、先住民集落が表象する「野蛮」を支配する構図が示されていたのだ(吉見 2010: 189-194)。

このパリ万博を訪れた日本人学者に、人類学者の坪井正五郎⁽²⁾がいる。坪井はパリ万博の様子を『東京人類学会雑誌』に連載している。坪井は、パリ万博で人類学上見るべきところとして、「人類住居の発達を示す諸建築、野蛮未開人種の村落、人類学恩顧博物場、トロカデロ宮中人類学部等」をあげ、そしてそれらの様子は、「住居発達を示す諸建設物は何れも誠の大きさに造

って有ますし村落には誠の野蛮未開人民が群集起居」していると、「人間の展示」を描写している（坪井 1889 : 524）。こうして、パリ万博で「野蛮未開人種」の「展示」を経験した坪井は、後年、内国博での人類館展示の中心人物となる。フランスから「人間の展示」を日本に伝えた知識人として、坪井は重要な人物だった。彼は、パリ万博での経験から、人類館の構想と具体化にあたって、人類館発起人の西田正俊と提携し、世界人種地図を作成して展示したのである（金城 2005: 43-44）。

2) 人類館事件(1) : 清韓両国人の展示中止

1903年2月の『東京人類学会雑誌』203号に、雑報として、第五回内国博での人類館発起人から坪井のもとに標本出品の協力依頼が来ていること、そしてもっと早く相談があればよかったとの感想が掲載されている（東京人類学会雑誌 1903a）。さらに、同誌同号には、つづけて、1903年1月14日付けの「人類館開設趣意書」が掲載されている。趣意書には、人類館のような施設は、「学術上、商業上、工業上の参考に於いて最も有用なるものにして博覧会に缺く可らざる設備」であり、「文明各国の博覧会を觀察するに人類館の設備あらざるはなし」と、その意義を強調していた（東京人類学会雑誌 1903b）。また、同趣意書には、第五回内国博が将来的におこなうであろう日本での万博開催のための準備となる位置づけの大イベントであるにもかかわらず、人類館がないことは遺憾であるとして、有志が協議して、「北海道アイヌ、台湾の生蕃、琉球、朝鮮、支那、印度、爪哇、等七種の土人を傭聘し其の最も固有なる生息の階級、程度、人情、風俗、等を示すことを目的とし各国の異なる住居所の模型、装束、器具、動作、遊藝、人類、等を観覧」させるためのパビリオンをつくるのだと、設立にむけた意気込みをあきらかにしている（東京人類学会雑誌 1903b）。

人類館計画は、学会誌にとどまらず、広く報道された。2月10日の『日本』および翌日付の『国民新聞』は、設立趣旨書の内容に即した人類館設立のニュースを伝えている。北岡（2002）によれば、この二紙以外にも複数の雑誌や新聞で、報道されたという。この報道に接して、憤慨したのが、当時

日本に留学していた清国留学生たちだった。清国留学生たちは、ただちに幹事会を開催して対策を協議した。そして、在関西の有力華僑商人に報告し、日本政府と主催者に「支那人」展示中止の交渉を求めた。また、留学生たちは、自ら主宰している雑誌『浙江潮』に「嗚呼支那人! 嗚呼支那人!!」と題したアピール文を發表し、その激憤を広く知らしめようとした(大塚 1985: 22-23; 巖 1991: 99-101; 呂 2005: 100-101)。

留学生たちの依頼にこたえた華僑商人たちは、人類館の報を知るや、博覧会当日に予定していた祝賀行事をとりやめるだけでなく、門前に巾旗を掲げることを決議した。こうした華僑商人たちのなかの有力者に、孫実甫という人物がいる。彼は、華僑の代表として「支那人」展示の中止に向けて奔走する。孫は、まず人類館発起人の西田正俊にかけあつたが、西田は交渉に応じなかった。そのため、孫は、事情を警察署へ訴えてた。また、神戸総領事館にも働きかけ外交ルートによる交渉を求めた(大塚 1985: 22; 北岡 2002: 210; 呂 2005: 102-103)。そして、外交ルートでは、清国公使から日本外務省に対して抗議が行われた。日本外務省は、抗議に対して、清国との関係が悪化することを恐れ、場外パビリオンを所管する大阪府知事に照会を行い、知事から人類館側への清国人「展示」を中止するように促した。この働きかけをうけて、人類館側は、清国人の「展示」をはずすことで事態を収めようとした(松田 2003: 121-122)。

人類館は、あらたに「學術」の冠をつけて、「學術人類館」として、1903年3月10日の開会を迎えた。このとき、すでに清国人の「展示」は行われていなかった。しかし、3月18日、同館を訪れた朝鮮人が、朝鮮人の「展示」をみて、大阪府警察部長宛に抗議を行い、その抗議の様子は、日本の新聞『大阪朝日新聞』でも報道された。また、抗議は、韓国公使から外務省にも寄せられた(北岡 2002: 212; 松田 2003: 122; 伊藤 2008: 115)。かかる事態を重くみた外務省は、外務大臣小村寿太郎の名で、抗議翌日に「人類館ヨリ清韓両国人ヲ除去セシメルベキ内訓」を、大阪府知事に通達した。内訓は、清韓両国公使から抗議が届いていること、また事態は、会場へ足を運ぶようプロモーションした両国人の気分を害しており、当初の目的を水泡に帰すだ

けでなく、民間人の間の交流を損ねるのは好ましからざることであるという内容である（外務省 1903）。松田（2003）は、この外務省の内訓から、「将来的に重要な貿易相手として清国、朝鮮を措定し、交流促進の契機として」第五回内国博を位置づける思考が確認できると指摘する（松田 2003: 122）。つまり、外務省としては、経済通商上の利害を損ないかねない事態と認識し、行動をとったのだ。なお、学術人類館側は、このような行政機関からの強い働きかけから、3月末までに朝鮮人の「展示」を中止した（松田 2003: 122）。

3) 清国留学生の抗議言説

人類館での清国人展示は、こうして、開館前に阻止された。外交ルートからの抗議が展示阻止において決定的だったといえども、そのきっかけとして、清国留学生たちの抗議運動は重要な位置づけにあったといっていよう。では、彼らは、何に憤っていたのだろうか？

彼らは、憤りの理由を、『浙江潮』において表明している。それによれば、印度と琉球は亡国であり、朝鮮はロシアと日本の保護国でかつ清国の旧藩属であり、さらに北海道アイヌ、台湾の生蕃、朝鮮、爪哇は、世界で最も卑しい人種であるのにもかかわらず、なぜ我ら「支那人」がこれらと同列に扱われるのか、と説明している（巖 1991: 101; 北岡 2002: 209; 坂元 2004: 73）。つまり、彼らの憤激は、なぜ自分たちが進化論的な階梯のなかで下部に位置づけられるべき「人種」と同列に置かれなければならないのかというものであった。

人類館への抗議とその展示の阻止は、内田（2007）が指摘するように、「支那人」をモノ扱いするような「政治的に正しくないパピリオン」が「政治的に正しい抗議」に屈した「政治的に正しい物語」ではない。つまり、「自分が差別されることへの憤激はあるが、それは差別そのものに対する憤激」ではなかったのだ（内田 2007: 231-232）。そして、さらに、こうもいえる。自らが下部に位置づけた「人種」への「差別主義的なまなざし」をむしろあらわにすることによって、そのまなざしを日本と同様に自らも共有する資格があることを明言したのだ（坂元 2004: 73）。

なお、梁啓超が主催した雑誌『新民叢報』でも、人類館事件について、いくつかの腐敗した我が旧俗（纏足とアヘン吸引者）を見せて野蛮人と同列にあつかおうとしていると抗議している。しかし、留学生たちと同様に、自分たちが野蛮人と同列に扱われることの怒りは示しているものの、そこに「差別主義的なまなざし」を修正するような要素はなかったと指摘されている（坂元 2004: 72）。

以上のように、彼らの抗議は、日本がもつ他者への差別的なまなざしを自らも共有する資格があることを主張し、同等の立場にあることをアピールするものであった。そして、次項で述べる清国人がかかわる人類館事件の第二幕でも、同様の言説が現れていく。

4) 人類館事件(2)：纏足女性の身元確認

「支那人」の展示が中止された後、学術人類館に、台湾人と称する中国服を着た纏足の女性がいるが、実は湖南省の人間であるとの噂がたつようになった。さっそく、清国留学生たちは領事や公使にかけあつたが、領事や公使は、湖南人らしいという話は聞いているが打つ手がないと答えるにとどまった。留学生たちは、この事態を日本人による侮辱と感じ、徹底的に争って、もし争っても状況が変わらない場合は一斉帰国の方針を打ち出した。その前に、まず事実確認をしたほうがよいと決議し、自ら調査に乗り出すことにした。こうして、周宏業が大阪に派遣された（大塚 1984: 23; 巖 1991: 106; 北岡 2002: 221; 須藤 2003: 6）。

周は学術人類館に赴き、「生蕃室」にいる中国服を身につけた一人の女性に対して、北京語、日本語、湖南方言で、その出自を尋ねた。しかし、彼女は、北京語、湖南方言を解する様子はなく、日本語で尋ねたときのみ、台湾人であることを答えた。その後、周は、学術人類館幹事に、女性の身元を確認する目的で来館しているので、詳細を教えて欲しいと尋ねた。幹事は、女性が、李宝玉という台北の人間であり、大阪府と大阪警察署に届けを出していることを説明した。周は、事態を了解し、学術人類館側から女性の身元を記した証明書を得て、東京に戻った（北岡 2002: 221-223; 須藤 2003: 5-6）。

こうして事態は收拾した。

周の調査のプロセスを追ってみると、留学生側の勘違いだったと片付けられない重要な問題が垣間見える。まず、周と幹事がやり取りをしていたとき、たまたまその場に居合わせた日本人来館者が、人類館は世界のあらゆる人類を一室に集めて学術研究に資するもので悪意はないのに、なぜ清国留学生は憤るのかと周に尋ねた。周は、その問いに、人類と規定している以上、文明と野蛮の区別はないはずなのに、展示が「支那人」以外は、印度、アイヌ、生蕃の類であって、中国はその生活の程度や文明のレベルは日本やアリア人と同等であるにもかかわらず、われわれを劣等民族扱いすることが遺憾なのだと答えている（厳 1991: 107; 北岡 2002: 223-224）。

また、証明書を受け取ったとき、警察署長が周に女性の様子について尋ねたところ、周は、自分は出自の調査に来ているだけであり、台湾が日本の領土であり、彼女が台湾人であるので、これ以上いうことは国際問題になると答えた。署長は続けて、留学生諸君は女性の展示を止めさせたいと思うだろうかと尋ね、周は、私見では恥ずかしいものであると答えている（厳 1991: 110-111; 北岡 2002: 224）。

周の応答は、自分たちは「劣等民族」ではなく「文明」に位置づけられるべき存在であり、だからこそ内政不干渉という「文明国の法」は知っているというスタンスからでたものだったのではないかと思われる。

5) 「台湾人」・女性

東京に戻った周は、台湾人と湖南人はどこが違うのか、台湾人が野蛮人と同類にされているにもかかわらず一言も発せられないのはなぜなのか、纏足女性が各国人の見世物となっている現実について子女をもつわれわれはよく見るべきだ、日本人が自分たちに無礼な態度をとっているが、このたびの件でかれらは弁解に終始し一言も無礼な言葉をはかなかったにもかかわらず、我が国の公使・領事たちの態度は何なのだ……と、友人にこの事件で経験した複雑な胸中を吐露している（大塚 1985: 23-24; 厳 1991: 111）

纏足女性をめぐる事件での論点は、女性の身元が台湾人なのか、それとも

湖南人なのかという点であり、植民地でない清国の人間を植民地台湾の人間として展示したのか否かであった。その一方、日本が「纏足の展示」をしたこと自体には明確な抗議はない。「纏足」を野蛮と位置づけて展示している学術人類館側の姿勢に、周も同意しつつも、完全にその視点に同化することはできない。他方で、纏足女性を完全に擁護することもできない。文明と野蛮、日本と清国、清国と台湾などの二項対立がいくつも存在し、その中に周はからみとられてしまったのだろう。そして、その脱出方法を日本批判ではなく、纏足への怒りに見出し、上記の複雑な胸中となって表出したのであろう（須藤 2003: 6-7）。

また、周をはじめとする清国人留学生たちの抗議運動のなかで、取り上げられていないのが、台湾館での纏足女性の「展示」である。台湾館とは、台湾総督府が設置を推進したパビリオンであり、日清戦争の勝利により植民地とした台湾の事情を「内地」の人びとに知らしめることを目的としている。この台湾館には、ウーロン茶を出す喫茶店が設けられ、ここにウェイトレスとして、纏足女性たちが雇用されていた。しかし、この状況に清国留学生たちが抗議を起こすことはなかった。また、実際に働く様子を見たであろう周も、台湾館の纏足女性については意見を述べていない。すでに日本である台湾への「内政干渉」と受け取られかねないからという理由も考えられるが、清国留学生たちの抗議の論点が「纏足」ではなかったことがさらに重要であろう。つまり、清国人に関する人類館事件の第二幕の争点は、「台湾人」なのかどうかということであり、清国と台湾の区別であり、さらには非植民地と植民地の区別だったのだ（須藤 2003:8-9）。さらに付け加えると、それは「文明」と「野蛮」の構図へとつながっていく。

第二幕の中で、須藤（2003）は、展示された女性、李宝玉への関心がほとんどないことを指摘している。李は、学術人類館側にとっては台湾の纏足女性であればそれで用が足り、清国人留学生たちにとっては彼女の出自が重要だったのだ（須藤 2003: 10-11）⁽³⁾。「野蛮」な被植民地「台湾」の「纏足の女性」であるか否かが争点となったことで、李という生身の個人への関心は消しさられたのだ。

4. 清国留学生たちの抗議言説の陥穽と現代への問い

本章第2節で言及したように、日本の近代化推進のための手段として、万博文化を受容することで生まれたのが、内国博だった。そこは、天皇のための政治的場であり、重要な儀式の場であった。ここを訪れることによって、人びとは、「日本」の姿を知り、そしてこれから目指すべき「近代化」はどのようなものなのかに触れた。それは、政治経済体制への影響だけでなく、「科学的」知識を流布する場としても機能する。

人類学という学問的な装いで企画された第五回内国博での人類館をめぐる、清国留学生たちが争ったのは、「支那人」を「アイヌ」、「台湾生蕃」などとならべて自らを「野蛮」に位置づけることへの激しい抗議であった。そこには、「近代文明」を吸収する目的で訪れた留学生がもつ、「文明」と「野蛮」の構図があり、自らを「文明」の位置へと回復させる争いであった。当時、日清戦争に敗れた清国人に対する日本人のまなざしは、差別的な、きわめて冷たいものだったと想像される。また、日清戦争後、日本では、中国分裂論や保護国論が公然と唱えられていた（伊藤 1994）。こうした時期に人類館が登場したことで、清国留学生たちのこれまでの怒りが爆発したという側面があるだろう。抵抗をせねば、「科学的」に「野蛮」へと位置づけられる可能性がそこにはあった。しかし、彼らの怒りは、「差別自体の抗議」として向かわなかったことに、今日的な課題を残すこととなった。そこには、千本（2008）が指摘するように、「差別の重層構造の階段を、一段でも上に上ることによって少しでも被差別の痛みを軽減したいという感覚」（千本 2008: 66）があったのかもしれない。

しかし、自らを「文明」の側へと位置づけようとする言説によって、清国留学生たちは深刻なジレンマに陥っている。なぜなら、自国が日本と同じ「文明国」だと主張することは、人類館が示そうとした植民地主義的な「文明」と「野蛮」の構図の支持にほかならない。人類館は幾度も抗議を受け、そして展示内容の一部中止はあっても、閉館に追い込まれることはなかった。その要因は、日本が将来的に万博開催を意図していたということが大きいが、

当時、日本が示そうとした「文明」と「野蛮」の階梯そのものへの強い批判がなかったことも見逃せないだろう。ここに清国留学生たちと日本の共犯関係を見出すことができる。

また、人類館事件で噴出した清国留学生たちの憤りは、内田（2007）が指摘するには、二つの危険をはらんでいた。まず、「文明国」になる、つまり「他国人に侮られることのない強者になりたい」という願望によって帝国主義の「弱肉強食」のルールを受容してしまったことである。そして、「纏足」や「公使・領事」などといった自国の「腐ったもの」が近代化をさまたげているという論理が生まれていることである。こうなると、「外」では自国を見下す「敵」と戦い、「内」では近代化を阻む「敵」と戦う「二方面作戦」を取らざるをえなくなる（内田 2007: 234）。結局、万博をはじめとするヨーロッパ的な近代化を普遍的な近代化として理解し、そして受容した日本と同様に、清国留学生たちもこれを受け入れてしまい、それを乗り越えることができなかつたため、彼らは「差別自体の抗議」ができず、戦略的な袋小路に入り込んでしまったのだ。

本章のこれまでの議論から得られる現代への問いを、ここで設定したい。本章の目的は、決して清国留学生たちの批判ではない。日本と中国で「文明」と「野蛮」の階梯に自らを「文明国」として位置づけようとする意識が共有され、むしろ共犯関係にすらあったこと、さらにそうした意識そのものへの批判がなかったことを問題にしている。この議論から、今後の検討課題として、110年前の「文明」と「野蛮」の階梯への意識から、現在の日中は完全に脱しきれているのだろうかという問いを設定したい。たとえば、経済格差の語り口、特定の少数民族へのまなざし、あるいは「強国」へのあこがれと転落の恐怖などに、その名残すらないといいきることはできるだろうか。思はぬところで、「文明」と「野蛮」の言説がでてきて、日中の共犯関係が成立してはいないだろうか。ぜひ、考えていただきたい。

（注）

⁽¹⁾ 別段風説書とは、松方（2012）によれば、1840年から57年にかけてバ

タフィア（現ジャカルタ）のオランダ領東インド政庁から江戸幕府に送付されたもので、政庁の役人が当時の新聞記事を日本向けに抜書きし、同時代の世界情勢をまとめたものである。

- (2) 坪井正五郎は、1889年から1892年にかけて、イギリス・フランスに派遣され、帰国後に帝国大学理科大学（現・東京大学理学部）の人類学教室教授に就任した人物である。
- (3) 周は、警察署で証明書を受け取った後、学術人類館側幹事と再び会った際に、李宝玉を生蕃室から出すように求め、幹事はこれに同意している（北岡 2002: 224）。

（引用文献）

- アンダーソン、ベネディクト(2007)『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、書籍工房早山。
- 伊藤真美子 (2008)『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館。
- 伊藤之雄 (1994)「日清戦争以後の中国・朝鮮認識と外交論」『名古屋大学文学部研究論集史学』第40号, pp.263-305。
- 内田樹 (2007)『街場の中国論』ミシマ社。
- エーデルマン、マーレー (1998)『政治の象徴作用』法貴良一訳、中央大学出版部。
- 外務省 (1903)「機密送第16号 人類館ヨリ清韓両国人ヲ除去セシメルベキ旨内訓」『大阪ニ於テ第五回内国勸業博覧会開設ノ一件』第4巻。
- 鹿島茂 (2000)『絶景、パリ万国博覧会—サン・シモンの鉄の夢』小学館。
- カーツァー、デイヴィッド (1989)『儀式・政治・権力』小池和子訳、勁草書房。
- 北岡正子 (2002)「第五回内国勸業博覧会と清国留学生」関西大学文学部中国語中国文学科編『文化事象としての中国』関西大学出版部, pp.205-234。
- 金城勇 (2005)「学術人類館事件と沖縄—差別と同化の歴史」演劇「人類館」上演を実現させたい会『人類館—封印された扉』アットワークス, p.27-69。
- 國雄行 (2005)『博覧会の時代』岩田書院。
- 國雄行 (2010)『博覧会と明治の日本』吉川弘文館。
- 巖安生 (1991)『日本留学精神史』岩波書店。
- 坂元ひろ子 (2004)『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』岩波書店。
- 須藤瑞代 (2003)「消えていく李宝玉：1903年「人類館」事件にみる新旧女性像の同時形成」『中国女性史研究』第12号, pp.1-14。
- 千本秀樹 (2008)「人類館事件と差別の序列—第五回内国勸業博覧会にお

- る人間展示『現代の理論』Vol. 14, pp.56-67。
- 坪井正五郎 (1889) 「パリー通信」『東京人類学会雑誌』第 43 号, p.524.
- 東京人類学会雑誌 (1903a) 「雑報 ○人類館」『東京人類学会雑誌』第 203 号, p.203。
- 東京人類学会雑誌 (1903b) 「人類館開設趣意書」『東京人類学会雑誌』第 203 号, p.203。
- 松方冬子編 (2012) 『別段風説書が語る 19 世紀』東京大学出版会
- 松田京子 (2003) 『帝国の視線—博覧会と異文化表象』吉川弘文館。
- 松村昌家 (2000) 『水晶宮物語』筑摩書房。
- 吉見俊哉 (2010) 『博覧会の政治学—まなざしの近代』講談社。
- 吉田光邦 (1985) 『改訂版 万国博覧会—技術文明的に』日本放送出版協会。
- 呂順長 (2005) 「大阪人類館事件における中国側の対応について」演劇「人類館」上演を実現させたい会『人類館—封印された扉』アットワークス, pp.98-119。
- Greenhalgh, Paul (1988) *Ephemeral Vistas: The Expositions Universelles, Great Exhibitions and World's Fairs, 1851-1939* (New York: Manchester University Press).

(参考文献)

演劇「人類館」上演を実現させたい会 (2005) 『人類館—封印された扉』アットワークス

本書は、人類館事件について多角的な論考やシンポジウムの記録が収められており、また「隠し扉」として収められた資料が非常に充実している。本章は、清国人に焦点をあてたため、沖縄のりびとが展示されたことについて触れていない。しかし、人類館事件の全体像を知るうえで、沖縄のりびとの展示と抗議運動、そして抗議言説の問題は、清国人留学生の抗議運動と同様に、現代的な示唆を与えてくれる。もしも人類館事件そのものに関心があるならば、本書を手にとることを勧める。

吉見俊哉 (2010) 『博覧会の政治学—まなざしの近代』講談社。

本書は、1992 年に中公新書として出版されたものが、装いを新たに講談社学術文庫として 2010 年に再び出版されたものである。本書は、日本の博覧会研究の「古典」ともいべき位置づけにあり、多くの文献で引用されている。本書では、博覧会という場が生み出したマイクロな権力の作用が明らかにされ、そしてスペクタクル社会理論を提示している。博覧会研究に関心があるものや、政治的なイベントの場が生み出す権力作

用を考察したいものにとって、必読の文献である。

松田京子（2003）『帝国の視線—博覧会と異文化表象』吉川弘文館。

本書は、エドワード・サイードのオリエンタリズムに基づき、「他者」の表象のありかたをめぐる「知」と権力の関係について、主に第五回内国勸業博覧会を中心として論じた力作である。本章で詳しく論及することができなかったが、博覧会という場で肉体的に感じる事ができた「他者」に関する意味の網は、来場者に深く刻みこまれたはずであり、日本の他者へのまなざしを考えるうえで、重要な示唆をあたえる本である。本書で詳細に述べる事ができなかったが、坪井正五郎をはじめとする当時の人類学がはたした他者表象への影響について関心があるならば、本書は非常に有意義な視点を提供してくれるだろう。